

鼻なおし・大田市富山町山中

令和2年9月16日

収録・解説・酒井 董美

イラスト・福本 隆男



[https://kanbenosato.com/min/wakancho\\_20200803.html](https://kanbenosato.com/min/wakancho_20200803.html)

語り手 渡辺休二郎さん  
(明治40年生まれ)  
収録・昭和48年8月4日

あらすじ

昔々あるところに、ちやうどおまえたちみたいな、かわいげな女の子がおったそうです。

ところが、それがかわいそうなことに鼻が低かったので、その子のお母さんが何とかして、鼻を高くしてやろうと、いつも心配していたら、ある日のこと、ちやうど鼻なおしが出来ました。

「鼻なおし、鼻なおし」と門を通ったので、

「こら、ええことだなあーと思つて、  
「鼻なおしさん。この子は鼻が低うてやれんで、何かでなおしてもらえせんかな」  
「さあ、何でなおしましよかな。ここにちやうど鼻(あめ)がああけん、鼻でなおいぢよきましよ」

それで、鼻でなおしてもらつたら、甘いので、やっぱりこゝろ舌を出しては、鼻をなめて、とうとうまた鼻がなくなつてしまいました。

「こら困つたことだなあーと思つていますと、また、二、三日したら、  
「鼻なおし、鼻なおし」と鼻なおしが門を通りました。

そこでお母さんが、  
「鼻なおしさん、鼻なおしさん。鼻でなおしてももうたら、とうとうこの子がなめて鼻がのうなつたで、また、何かなめんやなもんでおいてもらわれせんかな」と言う

と、  
「さあ、何でなおしましよかな。ここに蠟燭(ろうそく)がああけん、それでなおいぢよきましよ」と鼻なおしさんは蠟燭でなおしてくれました。

今度は鼻が出ると、子どもが着物の袖でちよつとこうなでます。そうすると右へなでると右の方へ鼻が傾くし、また、左へなでると左の方へ傾くして、また、鼻がなくなつてしまいました。

それで、おまえたちも、鼻が出たときには、舌を出してこゝろなめてみたり、それから、着物の袖でさあつと、こゝろ鼻をふいたりすつと、あのように鼻がなくなるから、あ

のようなことをするんじゃないよ。まあ、そればかり。

解説

これはまたユーモアにあふれた、そして微笑みながら聞くことのできる変わった話である。各地にあつてもよさそうだと思うのであるが、どうしたことか関敬吾『日本昔話大成』にもこの話は出ていない。つまり大田市で残されている単独伝承の話である。

また、「こら」は「あらすじ」として掲載した文章は、実際は語り手を省略することなく、語り手の言葉そのままを紹介したものである。

おそらく子どもの教育のため、面白い中にもそれとなく教訓をちりばめて作られた話であろうと思われる。

昔話をよく見ると、隣人型の「花咲爺」や「瘤取り爺」、あるいは「猿地藏」「鼠浄土」などでは、「人まねをするものではないません」と教訓がついているが、この話では涙が出る場合の心構えを説いているのである。

(元島根大学法文学部教授)